

PBL における課題

産業技術大学院大学
中鉢欣秀

2014-09-29

はじめに

PBL における課題

- テーマ設定に関する話題

振り返り

- ここ数年のテーマ設定について振り返り、今後のテーマを探る

タイトル

ソフトウェア開発プロジェクトのマネージャ育成メソッド

内容

- PMBOK を実施するための最適なツール技法を探る
- Redmine, MS Project Server
- プロジェクトマネジメントガイドブックを作成
- ベトナム国家大学 UET, SFC の学生との PBL をマネジメント
 - 合計 5 つのサブプロジェクト

タイトル

ソフトウェア開発プロジェクトのマネジメント方法論

内容

- アジャイル開発プロセスのマネジメント方法論
- コーチングや教材作成
- アジャイル開発の専門家との連携
- ベトナム国家大学 UET, SFC の学生との PBL を実施

タイトル

ソフトウェア開発プロジェクトのマネジメント方法論

内容

- Scrum をマスターして実践する
- 小規模・短納期のソフトウェア開発
- 自己組織化・ヒューリスティックな体得
- ベトナムとのプロジェクトは enPiT で実施

開発のプロセスから「場」へ

PMBOK から Scrum へ

- 当初は PMBOK 型のプロセスを参考に、少人数・短納期型の開発プロセスを探求することをテーマとしていた
- 2011 年ころから、Scrum を指導するアジャイルコーチの方々と接するようになり刺激を受けた

プロセスから場へ

- アジャイル型開発は、明確なプロセスがあるわけではない
 - Scrum には、若干のプロセスの規定がある
- PBL では、定められたプロセスに従うのではなく、学生が自ら良いやり方を見つける「場」であるべき

グローバル PBL の反省

課題

- 日本側学生の英語力の問題
- これといった成果物が出ないわりには手間がかかる

状況の変化

- アウトソーシング型の国際プロジェクトはおそらく、魅力がなくなっている
- 「グローバルなマーケット」に通用する技術者育成が重要

タイトル

Global and Agile Software Development in the Ruby Community

内容

- Ruby のコミュニティに参加し、グローバルに活躍できるソフトウェア開発者を目指す
- Ruby のエコシステムや、クラウド型のツールを活用したソフトウェア開発
- 前半（1,2Q）は一人アジャイル開発を実施
- 後半（3,4Q）はチームによるアジャイル開発

現状について

進捗について

- enPiT に参加した学生が多かったこともあり、ツールを使った開発を取得するための期間が予定よりも短くて済んだ
- Ruby のコーディングについては、コードのレビューを徹底して指導できた

成果物への期待

- 予定を前倒しして、チームによる開発に進むことができた
- mruby で自己記述できるテキストエディタの開発
 - うまくいけばおそらく画期的

- 昨年度は、ベトナム・ブルネイの2カ国、今年はニュージーランドが追加
 - 私はベトナムを担当
- 今年は、英語のできるメンバーが多い印象
- 今回初めて、遠隔でミーティングをしている時にベトナムを訪問
 - ネットワーク環境、TV 会議用マイクがないことによる問題を目の当たりにした
- 全体のアレンジは土屋先生が担当してくれたので、自分の負荷は減った

今後のテーマ設定

- 開発の最前線の技術の変化は激しく、キャッチアップが必要
 - 技術動向を踏まえ、引き続きテーマを見直していく
- 開発方法論については、アジャイルとクラウド型開発環境が現状では妥当なテーマ
- 「どうつくるか」から「何を作るか」に比重をシフトしていきたい
- 「マーケットのグローバル化」に対応できる技術者育成をおこなっていく
- enPiT 科目の今後の動向もふまえない